

山本有三

山本有三

新潮社版

山 本 有 三

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日
発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71
電話東京(03)260-1111(大代) 振替東京808 郵便番号162
印刷所／塚田印刷株式会社 製本所／大日本製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

目次

波

妻

子

父

眞実一路

解年注
說譜解

河盛好藏

五

五

八

二七

三七

四三

四三

五九

山
本
有
三

波

妻

一ノ一

行介（コースケ）はいつもの停留所でおりました。おりるとき、帽子に手をやらなくてはならないほど、風が強かった。

彼は赤っ茶けた風に押されて歩いて行った。ときどき、紙くずや、こつばなどが、トンボがえりをしながら、彼のズボンのあいだをすりぬけて、ころがって行った。

波 行介はオーバーのえりを立てていたけれども、それ

でも、カラーの下まで、つめたい空気が流れこんできた。そのうえ、どうかすると、クギでも投げつけられるように、おゝ粒の砂がバラ／＼と、彼のえり首に落ちてきた。

彼は、横丁にはいったら、いくらか風がよけられるだろう、と思った。急いで、うちのほうへ曲がる最初の横丁を曲がった。しかし、しばらくしてから、「きようは寒いから、帰りに肉でも買ってこよう。」けさ、出がけに、妻にそう言ったことを思い出した。

そうだ。肉を買って行ってやらなくては。彼は、また電車どおりに引返して、突きあたりの肉やにはいった。

板まえばが肉を切っているあいだ、行介は厚いマナイタの前に突っ立って、ホーチョーの動きききをぼんやり追いかけていた。なま肉のにおいが鼻を打って、彼の胃ぶくろを驚くほど波だたせた。

マナイタの上に斜に落ちているゆう日が、鋭い刃ものにあたって反射すると、ちょうど油でもはねた時のように、天じょうや、肉をぶらさげている大きなガラス戸ダナに、きらっ、きらっ、ちいさい光をはねか

せた。

突然、ふわっとしたものが、ひぎのあたりにからみついた。彼はびっくりして下を見た。ふる新聞が風に吹きまкруられて、飛んできたのだった。なんのことはない、木の根かたに落ち葉が吹き寄せられるように、彼の足もとは、一時の吹きだまりになったのだ。

「こんなところに突っ立っていると、ざまがないや。」
心の中でつぶやなぎながら、彼はいま／＼しそうに新聞を往來にけとばした。しかし、べつとりと張りついたようになって、ふる新聞はなか／＼足から離れなかつた。彼はしかたがなしに、ほこりだらけの紙を指でつまんで、かざしにも放してやった。ぼろ／＼に破れた、大きな紙きれは、また往來をころがって行つた。肉やの店さきに立つたびに、いつも思うことだが、どうも、この、待っているあいだくらい、まの悪いものはなかつた。

板まえば切つた肉を竹の皮の上に薄くのばして、丁寧にならべていた。それから、ハカリの上に載せて、少しばかりの肉をたしたり、へらしたりしていた。行介はお預けをくつた犬のように、黙ってそれをながめ

ていた。

「見並（ミナミ）君。」

肩のところで声が出た。ふり向くと、一つのえ顔に突きあつた。園田（ソノダ）だつた。

行介はちょっとしよげたが、向こうが笑っているので、彼もてれ隠しに、ほ／＼えんで見せるよりほかはなかつた。

「ごちそうだな。」

「いやあ、とんだところを見つかつちやつたな。」

一ノ二

「あい変わらずだね。」

園田の顔には笑いがまだ残っていた。

「何があい変わらずだい。」

行介はおつかぶせて言つた。「あい変わらずのろいね。」「あい変わらず女房孝行だね。」「あい変わらず……」園田のあい変わらずに負けていたら、どんなことになるかわからない、と思つた。

「いや、あい変わらず気がきいてるってんだよ。」

「ふん。」

「おれがくることを察して、牛肉を買っておこうなぞは、感心だよ。」

「たぶん、そうくるだろうと思っていた。おい、心配しなくてもいいよ。君にはコマ切れをたくさん買っておいた。」

「コマ切れ、コマ切れか。」

「何を言っているんだい。みっともない。」

「おい。——女房にコマ切れを買って帰りけり。ってのは、どうだい。」

「どうもうるさくってかなわらないな、迷句をひねくるやつが、そばにいと。」

「しかし、実感があつてなかくいいだろう。」

「うん、たびくコマ切れを買いつけてると見えて、その点はさすがだね。」

「まだあんなことを言つてやがる。もういい加減に降参しろよ。」

「はムム。」

「お待ち遠さま。」という声が響いた。そして、竹の皮づつみが行介の前に突き出された。彼はそれを受け取ると、園田とつれ立って肉やの店を出た。

「だが、ぼくがあすこにいること、よくわかったね。」

「なあに、君の姿は三丁もさきからわかつていた。」

「どうして。」

「ぼくはこの道をやつてきたんだもの、つきあたりの店に、君の丸まった背なかが出つぱつていりゃ、いやでも目につくじゃないか。おれは道々考えてきたんだが、どうもなんだね、ネコ背つてやつは、なかく句になりにくいね。」

「バカにするな。じゃ、君は、ぼくのところへ行つたのかい。」

「うん、もう帰っているころだと思つて。」

「それなら、待つていてくれればいいのに。」

「おれもそうしようと思つたんだが、だれもいなかつたもんだからね……」

「かまやしない。あがりこんで待つてりゃいいじゃないか。ほかのうちじゃあるまいし。」

「ところが、戸がしまつてゐるんだ。引っぱつてみたけれど、あかなかつたから、しかたがない、帰つてきたのだ。」

「そうか、そりゃ失敬した。じゃ、女房、どつかへ買

い物に出たんだらう。」

きよりは土曜日だし、ちょうど園田もやってきたところだから、久しぶりでひと口やりたいと思つて、行介は途中、取りつけのさか屋に寄つて酒を頼み、うちに帰つた。うちは、園田が言うように、戸がしまつていた。妻はまだ帰つていないらしい。彼は裏ぐちにまわつて、あま戸のかけ金をはずした。

一ノ三

なかはまっ暗だつた。

行介は手さぐりで電灯を探し、スイッチをひねつた。それから、急いで玄関に行つて、格子（コーシ）とあま戸をあけた。

「いや、お待ちどお。」

「ほんとうにお待ち遠さまだ。なんだね、肉やのマネイタの前に立たされるのも、いい図じゃないが、戸のしまつたらうちの前に、ちよこなんと突つ立ってるのも、あんまりありがたいものじゃないね。」

園田は、へらず口をたゞきながらあがつてきた。

行介は、なが火バチの横にすわろうとすると、煮え

たぎつた鉄ビンが、重たいフタをバタリ／＼押しあげているので、彼は立つたまゝ、あわてて鉄ビンをわきにおろした。「戸じまりをして、外に出て行くくらいなら、火をいけて行けばいいのに。」腹の中で、彼はすの妻にこごとを言つた。

しかし、じつを言うと、赤々とおこっている火は、吹きつつあらしの中を、冷えきつて帰つてきたからだには、この上もなくうれいものだった。ふたりは火バチの上に手をかざしながら話し合つた。

園田がやってきた用むきは、金のことだった。まだ来月と思つていた細君のお産が、急におとゞいあつたものだから、てんでこ舞いをしてしまった。で、五十円か、三十円ばかりほしい、と言ふのだった。ふたりは、しよっちゅう、このくらの金を貸したり、借りたりしている仲だった。園田はずばらのように見えて、案外かたい男で、金銭でまちがいのあつたことはなかつた。ことにおもしろいのは、それを返しくるとき、味の素だとか、塩せんべいだとか、その利息に相当するくらいのを、いつもきつと持つてくることだった。行介も、借りたときは、やはりそうすることにしていた。

園田の話は事情が事情だし、それに、ちょうど三十円ばかり手もとにあつたから、さっそく用だてることにした。行介はその話が一段落つくと、台どころに立つて行って、ネズミイラズだの、戸ダナだのを、しきりにガタピシいわせた。

「何を見つけてるんだい。」

「おかしいな。どこへしまいかんじまつたのかしら。」

「どうも女房がないのと、しょうがないな。」

「おい、ごちそうなら、また、ゆっくりなりにくるよ。」

「まあ、そんなことを言わないで、ぼくがせっかく買ってきたんだから、肉を突つついて行けよ。」

「しかし、奥さんがいないところだからね……」

「きょうはバカに遠慮するじゃないか。」

「そういうわけでもないが、金を借りたり、ごちそうになつたりしちゃ、少し話がうま過ぎるからな。」

「いやなことを言うやつだな。そんなことを言つてるひまに、いいから酒でもつけといてくれよ。」

「今しがた小僧が持ってきた酒のトックリを、園田の前に押しやった。」

「驚いた。細君が、おれのほうにまで雷がお

つこつてくる。」

「つまらないことを言うなよ。」

「しかたがない。細君が帰ってくるまで、おかん番をつとめてやろう。」

「それだ。恩をきかせてから飲もうってんだから、君は

太い料けんだよ。」

「なに、そんなことはありやしないが……」

「ナベ、ナベ、ナベと。いつたい、どこへ入れちまや

がったのかな。」

「なんだい、牛ナベかい。」

「うん、困つたな。こゝになければと——」

「そのぐあいじゃ、こゝのうちでは、めつたに牛肉な

んか食わないと見えるな。」

「飲まないさきからその調子じゃ、飲んだら何を言

だすかわかりやしない。」

「おい、いつたい、そんなに飲ませるつもりかい。」

「すぐそんなことを言う。だから、酒のみはいやし

つてんだよ。」

「そのものをはつきり言うもんじゃない。酒がはいら

ないうちに、まっかになつてしまふじゃないか。」

一ノ四

「へんなもんだな。自分のうちでいながら、台どころときたら、どこに何があるんだか、さっぱりわかりやしない。」

「実際なんだね。いるときには、さほどにも思わないものだが、いないとなると、これで、不自由なものだね。」

「おい、つまらない親切なんか、よしてくれよ。」

「だが、そういうもんじゃないか、いったい、細君なんてものは……」

「あつた、あつた。なあんだ、こんなところに突っこんであつたんだ。」

米ビツの横に二寸ばかりあきがある、その狭いあいだに、牛ナベはむき出しのまま立ってかけてあつた。

「そうか。じゃ、いよ／＼君のしいれてきた牛肉にありつけるわけだね。」

「今までは、どうなることかと案じていたって、言やしないか。は／＼、さあ、これでネギさえあれば文句はないぞ。ところで、ネギはと……」

行介は台どころのあげ板を開いて、下をのぞいた。

暗いなかになく光ったものが十本ばかりそり返っていた。彼はそれをみんな取りだして水で洗い、あぶなっかしい手つきをしながら、ザクリ／＼切りはじめた。

こうしてネギが買つてあるところを見ると、妻は彼が肉を買つてくることを、忘れているものとは思えない。しかし、今もつて帰つてこないというのは、どうしたわけなのだろう。彼の帰つてくる時間は充分承知のはずだし、それに、その時刻に、うちをるすにするとどうよなことは、今までにも、ついでなかつたことだけに、行介はホーチョーを動かしていながら、考えは絶えずそこに走っていた。

「おい／＼、カフスがぬれるよ。」

園田の声で、行介の考えは断ち切られた。

「洋服を着かえたらい／＼じゃないか。」

「いや、めんどくさい。もうじきだよ。」

「それじゃ、細君のエプロンを前にかけるんだね。そうして、ついでに、あたまに白い帽子をのつけるんだ。」

「バカにするな。」

「おい、新まえのコックさん、指を切らないように頼むよ。」

「大丈夫だよ。だが、こんなことをしていると、君と自炊していたところが思い出されるね。」

「あのときもさ、君はよく指を切ったぜ。おかげで、ぼくは、なんと血ぞめのタクアンを食わされたかもしれやしない。」

「しかし、君がいくらかでも血のめぐりがよくなったのは、あれからだ、と思や腹も立たないだろう。」

「へん、あきれてものも言えやしない。——そろくおチョーシをつけ始めようかね。」

「なんだい。まだやらなかったのかい。」

「まだやらなかったかって、牛ナベが見つからないうちから、おかんをしちや、つき過ぎちまうじゃないか。」

「なるほど、大きにそうだね。——おい、トックリは茶ダンスにはいつているぜ。」

「如才はないよ。もうちやあんと出してある。」

園田はトックリに酒を移して、しずかに鉄びんのかに沈めた。

「え、君。この、ポチャリリという音は、なんとも言えないね。」

「そうだね。」

「そうだねは、話せないな。なんじゃないか、芝居で言や、これは幕あきの木みたいなものだ。こいつがボコリだの、ポチャリだのときた日には、酒の味はなくなっちまうからね。おれは女房にだって、こいつばかりは任せはしないよ。——女房ってば、奥がたはバカに遅いじゃないか。」

一ノ五

「女房なんかいなくなつて、かまやしないよ。さあ、できた。」

行介は切ったネギをサラにもつて、洗った牛ナベといっしょに茶のまに運んだ。

やがて、肉がジューク／＼煮えだして、火バチの上は急に活気づいてきた。

「酒もついたし、肉も煮えてきたし、もう、なんにも言うところはないや。」

二、三杯ですぐどろんとしてしまふ行介は、目がねの曇りを気にして、度の強い近眼鏡をはずし、息を吹きかけては、しきりにハンケチでふきはじめた。

「これで女房さえ帰ってくりや、だろう。」

園田はゆるやかに、杯をくちびるのところに持って行きながら、少し目じりをさげて、行介の顔をのぞいた。

「なあに、女房なんか、どうだっていいさ。」

「なんとか言ってる。」

「全くだよ。」

「そんなことを言うと、向こうじゃ、もう帰ってまいりませんよ、と言ってくるぞ。」

「ところが、そんなのはちがうんだからね。」

「あきれた。こりゃ手ばなしだ。」

「まあ、なんにもありませんけれども、どうか充分めしあがってください、って、ところかね。おい、君。こっちのほうで煮えているぜ。」

「おれはもうたくさんだよ。おらあ帰るよ。バカくし。」

「さようでもございませうが、これは手まえが買ってまいった肉でございませうし、こちらは手まえが刻んだ……。」

腹の底には何かつめたいものがよどんでいながら、行介はへんにはしゃぎたかった。しかし、冗談をいっ

ているうちに、自分でも空しくなつて、途中で急にやめてしまった。

園田は帯のあいだから時計を出した。行介はそれを見ると、おどすように、

「おい、帰るのはまだ早いぞ。」

「う、うん。」なま返事をしながら、園田はなお時計をながめていた。

「もう少しいろよ。」

「う、うん。——しかし遅いな。」

「まだそんな時間じゃないだろう。」

「いや、奥さんがさ。——買い物にしちゃ、少しおそ過ぎるじゃないか。」

「……………」

「どこへ行ったか、心あたりはないのかい。」

「そうだね。」

「おい、隣へ行って聞いてこいよ。ちよつとお尋ねしますが、手まえどもの家内はどこにまいりましたらうって。」

「なんだ。本気にしていると、すぐちゃかしやがる。」
「しかし、ほんとだよ。何かことづけがあるかもしれ

ないぞ。」

「いいよ。女房なんか、いたって、いなくなつて。君さえいれば。さあ、一杯いこう。」

「おい、おれを女房と取つちがえちゃ困るよ。ぼくは奥がたが帰つてくりゃ、立ちどころに引き取るうって人間なんだからね。」

「そう帰るくゝつておどかさなよ。」

「いや、そういうわけじゃないけれど、なにしろ、うちのぼろがなんだからね……」

「あ、そうか。はムム。——そんなに子どもつてかわいものかね。」

一ノ六

「まあ、持つてみるよ。」

「いやにおやじぶるな。」

「しかしね、君……」

「驚いたな。これが当年の園田だと思ふと。」

「まあ、なんとも言う方がいいさ。人間、子どもを持たないうちは、まだ人生の半分しかわからないんだよ。その意味で、君なんかは半人まえぐらいの値うちつき

りないんだぜ。結婚して、まだやつと一年だろう。」

「おい、はじめておやじになつたつて、そう感ばるなよ。」

「いや、べつに感ばりやしないが、なんだよ、君、子どもつてものは……」

「子ども、子どもつて、そんなに珍しがることはないじゃないか。ぼくなんか、子どもなら、なんにんでも持つてゐるよ。」

「なんにんでも？」

「うム。」

「おい、ほんとうの話かい。」

「ほんとうさ。学校へ行けば、子どもなんかよくしてゐる。」

「なあんだ。小学校の生徒か。君はたちが悪いよ。すぐ人をかつぐから。」

「いや、かついだんじゃない。まじめな話だ。」

「バカくゝしい。学校の子どもなんか、なんにんあつたつて、しかたがないじゃないか。」

「そんなことはないさ。」

「いや、君がなんと言つたつて、他人の子じゃだめだ

よ。自分の子でなくっちゃ。どうも、小学校の先生なんて、しょうがないね。こんなことが、わからないんだから。」

「何がしょうがないことがあるものか。自分の子だの、他人の子だのと、区別をつけるようじゃ、学校の教師はつとまらないよ。」

「そりゃ教壇に立った時の話だ。まあ、自分の子どもを持ってみるよ。どんなもんだか。」

「いや、そんなものは当分まっぴらだね。」

「はゝゝゝ。実際、女房さえ食わせられないんだからね。——おや、もう九時になる。こりゃ驚いた。君、すまないが、ぼく、失敬するよ。何しろ、赤んぼうと産婦とおきっぱなしだからね。」

「そうか。そりゃ悪いことをしたな。あんまり引きとめちゃって。」

「なあに／＼。じゃ、奥さんが帰ったら、どうかよろしく。」

「近いうちに、赤ちゃんを見せてもらいに行くよ。」

「うん、是非やってきてくれたまえ。」

園田が帰ったら、家のなかは急にひっそりとしてし

まった。行介はつまらなそうに、食器の取り散らされてるなかに、ごろりと横になった。そして、今まで園田がすわっていた座ぶとんを、寝たまゝ腕をのばして引っぱり寄せ、二つに折って、あたまたの下にあてがった。

牛ナベは、つゆが切れたとみえて、ジイ／＼火バチの上でうなっていた。焦げつくような異臭が鼻を突いたけれども、彼は起きあがるうともしなかつた。

そのとき、裏のほうで何かガチャガチャーンというはげしい音がした。妻が帰ってきたのかとも思ったが、それにしては、少しするど過ぎる物おどだった。隣の物ほしザオが吹き落とされたのかもしれない。外はあい変わらず風がひどいらしい。

一ノ七

行介は突然むっくり起きあがって、自分の机のところにいった。彼女は急な用事でもできて、外出したのかもしれない。何か書いたものがおいてありやしないか、彼はそう思って机の上を調べたけれども、いや、引きだしのなかまで調べたけれども、それらしいものは見あたらなかつた。